

ユニークな地質系博物館

4. 木浦郷土博物館

村尾 智¹⁾

木浦鉾山の町

大分・宮崎県境には海拔1600メートルを越す祖母山・傾山・大崩山が連なり峻険な地形をかたち作っている。この地方は大分県宇目町・緒方町および宮崎県高千穂町・日之影町にまたがるが古代より重要な鉾山地帯であった。たとえば宇目町には「木浦鉾山」という文字通り木浦鉾山にその名の由来を持つ集落がある。鉾山風俗を伝えるさまざまな歴史資料を残すこの地(写真1)には鉾山地帯の文化・伝統を後世に伝えたいという気持ちがあるが、これから紹介する宇目町立木浦郷土博物館も、小さいながらそうした意識を反映したユニークな施設である(写真2)。

木浦鉾山教室と郷土博物館

木浦郷土博物館の歴史は中学校教師が始めた啓蒙活動

にさかのぼる。木浦鉾山が盛んに操業していた昭和20年代後半、安藤 隆・森竹利博という2人の先生(写真3)が道ぞいに露出した岩石に説明の看板を立て、中学校に鉾石標本を展示した事が最初である。この活動は木浦鉾山教室と呼ばれたが、中学校、鉾山会社および地元民の協力を得て木浦周辺の自然をそのまま教材として利用し、また希望者は鉾山施設の見学もできるというものだった(写真4)。つまり木浦の集落全体をそっくりそのまま「生きた博物館」として使う画期的な試みであった。

安藤先生は奇祭山あがり*や民謡宇目の唄げんか**を世に紹介した事で知られる(村尾・田中1991)。森竹先生は化学専攻だったが地学にも詳しく、教室の理科分野は彼の担当だった。鉾山教室設立の背景は森竹先生の次の文章で知る事ができる。

『……このような古い鉾山であるから、鉾山労働者も所、渡り坑夫は少く、この土地に定着し、先祖代々より伝わる古文書や、昔の鉾山の道具類、鉾石標本等を所有



写真1 木浦鉾山神社の石灯籠。享保13年製。

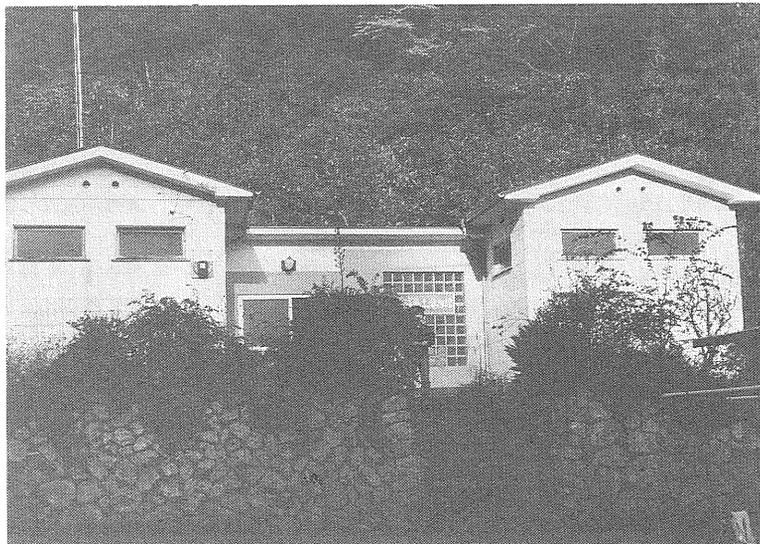


写真2 木浦郷土博物館全景。左側が鉾石展示室。右がボーリングコアと民俗資料展示室。建設当時はハイカラと評判をとったという。

1) 地質調査所 鉱物資源部



写真3 安藤 隆と森竹利博。最前列で座っている大人が安藤先生。その左うしろのオールバックの青年が森竹先生。蒲江中学校記念写真。

古来の風習等をよく知っている古老達も、老衰して次々と死に絶えてゆく有様でこのような事では、一般人はもとより、専門家でも、将来この鉱山を研究する手がかりを永久に失ってしまうであろう。「何とかならないか」と心配する人々が集まって、何度も会合を重ねた揚句生れ出たのが「木浦鉱山教室」である。』

鉱山教室は、外交的で情熱的な安藤先生と、温厚着実な森竹先生の名コンビによって順調に発展し（村尾1991）、昭和27年頃には当時としては珍しいブロックだての郷土博物館がオープンした（写真5）。しかし残念なことに、森竹先生は昭和30年に重岡中学へ転出、また、体があまり丈夫でなかった安藤先生は無理がたたって肺をわずらい昭和34年他界する。

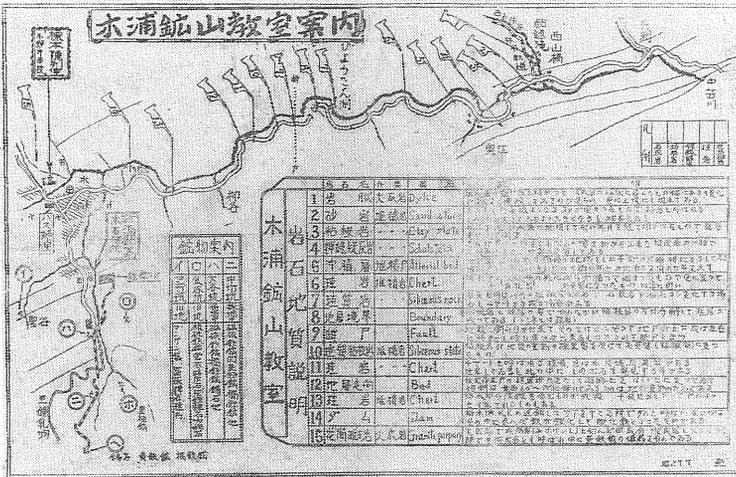


写真4 木浦鉱山教室案内図。ガリ版ずり、B4。

博物館の現状

以上のような背景を持つ博物館だが、今では地域ぐるみの活動はなくなり、建物だけが残っている。建物自体は平屋建てで、中央に玄関があり、左右2つの展示室を持つ。片方は鉱石標本室に、もう一方はボーリングコアや民俗学的資料の展示室になっている。鉱石標本室（写真6）には貴重な標本が多数集められているものの、長いあいだ放置されたため、ラベルの字が消えかかったり、又はすでに消えてしまっ

しているものもあるが、どこの鉱山にもつきものの悪ブローカーにだまされ、みすみす貴重な品をタダでくれてやった実例も多い。かてて加えて、この鉱山部落の大半を失うような大火が二度もあったため、相当貴重な資料が烏有に帰している。また、昔の鉱山で実際に労働し、

* 「(赤衣、赤面の荒神と若い衆が) 生大根の切口に鍋ズミをなすりつけて、それを隠し持って誰かれのえんりょえしゃくなく、追い廻して顔につけるのですが、(中略)、すべて「鉱山繁栄」の祈願がこの祭りにこめられていることはまちがいありません」(安藤 1959 a)。

** 安藤 (1959 b) 参照。



写真5 郷土博物館の入口で。安藤先生と木浦鉱山職員。昭和31年11月21日。

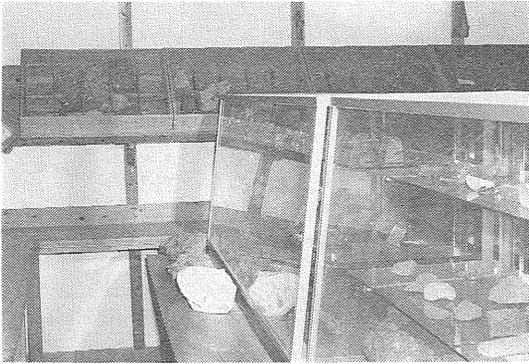


写真6 鉱石標本室。豊栄鉱山や木浦鉱山の鉱石がぎっしりと並ぶ。

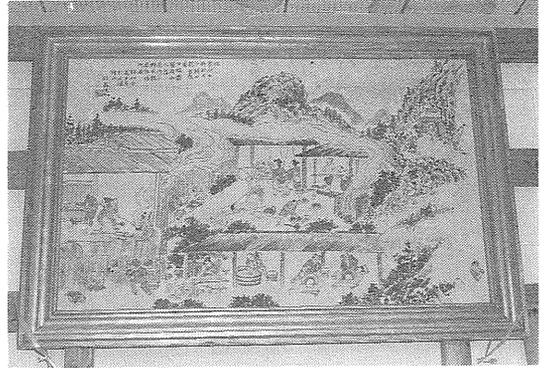


写真7 豊州大野郡大平鉱山錫精錬図。

ている。ポーリングコアや民俗学的資料の展示室では、かつて木浦鉱山を経営した岡藩の藩札がまず目を引く。また、豊州大野郡大平鉱山錫精錬図(写真7)。ふいご、ゆりばちなども展示してあるが、保存状態が悪く、いつまで原型をとどめていられるか危ぶまれるものが多い。ポーリングコアの標本は、番号がチョークで書かれているのでいつかは標本としての価値を失うであろう。

博物館の今後

上で述べたように、個人の呼びかけに始まって地域ぐるみの活動になり、更に町立博物館となった点、鉱山地帯の歴史資料を保有している点、鉱石資料が圧倒的に多い点で、木浦郷土博物館は極めて珍しい存在だが、その展示環境は劣悪である。地元の人々によると、掃除や草むしりはボランティアで行っているものの、展示内容については手のつけようがないという。郷土博物館が個人の情熱によって建てられ、地域ぐるみの協力を受けた事を思うと、現在の状況はまことに残念である。木浦には教材として利用された所以以外にも斧石が多量に出る露頭、昔の道具が一式残ったままの旧坑(通称かねかけ山)、明治頃の鉱山跡(黒門山)など手つかずの場所が沢山ある。この機会に、博物館の維持だけでなく、集落全体を「地域博物館」としてもう1度機能させる事を検討すべきであろう。熱域開発のあり方についての議論はさてお

き、宇目町が木浦の特性をどのように生かすか今後の動きを見守りたい。

謝辞 安藤サトノ氏、森竹ミツヨ氏には当時の様子を詳しくお話しいただいた。山口大学の松本征夫先生には貴重な文献のコピーをお送りいただいた。ND清心短大の田中由身子講師には宇目の唄げんかについて調べていただいた。斎藤賢二事務官には写真5の接写をしていただいた。以上の皆様に厚く御礼申しあげる。

メモ：木浦郷土博物館

所在地 ㊟879-34 大分県宇目町木浦鉱山
 問い合わせ先 宇目町企画開発課 ㊟0972 (52) 1111
 見学申込み先 安藤サトノ氏 ㊟0972 (55) 4007

参考文献

- 安藤 隆 (1959 a)：奇祭山あがり祭り。「祖母大崩山群」
 p.136-141, しんつくし山岳会発行。
 安藤 隆 (1959 b)：宇目の唄げんか。「祖母大崩山群」
 p.163-179, しんつくし山岳会発行。
 村尾 智 (1991)：2人の教師と木浦鉱山教室。鉱山地質, 41,
 14。
 村尾 智・田中由身子 (1991)：木浦鉱山教室に関する資料集。
 地質調査所研究資料集, no. 157。

MURAO Satoshi (1991)：Kiura Museum

<受付：1991年3月1日>